

居酒屋

ほったくり

秋川滝美 Takimi Akikawa

4

# 目次

辿ってきた道……………

325

心地よい香り……………

267

茶がゆの甘さ……………

205

移らぬゆくものたち……………

143

柔らかく包み込むもの……………

71

意地つ張りなサヨリ……………

5

意地っ張りなサヨリ

酢  
漬

ピズ(白菜)のピザム

サヨリの塩焼

ホタテイカの酢味噌汁

サヨリのこぎ卷ムネ

記念写真の背景は満開の桜、というのがかつての入学式の定番だったけれど、昨今の桜はせっかちでそこまで待つてはくれない。

緑が混じり始めた桜の下で入学式を迎えた新一年生も、数日が過ぎ、なんとかランドセルに馴染なじんできた。いかにも重そうで、まだ背負っているというよりも背負われている感かんは否めないが、それでも学校からの道を元気よく帰ってくる。

東京下町にある居酒屋『ぼったくり』の店主——美音みねは、そんな一年生たちとすれ違いながら『スーパー呉竹くれたけ』に向かう。仕込みを終わらせても店を開けるまでまだしばらく時間がある。そんなとき、買い物が出てら『スーパー呉竹』までウォーキングをするのが美音の健康法のひとつだった。

今日はいつもより時間がある。もうちょっと足を伸ばしてみようかしら……

そう思った美音は、『スーパー呉竹』を通り越し、さらに駅のほうに向かって歩き続けた。

春の陽気に誘われ、いつも駅に向かうときに乗るバス停も通り過ぎてどんどん進む。暖かい日差しは、せっせと歩く美音にはむしろ暑いくらいだったが、汗をかいたほうがダイエットには効果的よね、なんて自分に言い聞かせる。さらに歩いて、時間もなくなってきたしそろそろ引き返そうか……と思ったころ、大きな工事現場に辿り着いた。

あ、ここ、もう壊し始めたんだ……

そこはかつて鉄鋼会社の社宅だったが、閉鎖が決まり、住民たちは皆転居した。

近隣の住民は、不景気だから買い手がつかず自分そのままになるのではないかと噂していたが、取り壊しが始まったところを見ると無事に売れたらしい。土地の周りに仮囲いが施され、中からは建設重機の唸るようなモーター音が聞こえてくる。

簡易フェンスの切れ間からは、作業服の男たちが図面を覗き込みながら何事か話し合っている姿が見えた。もしかしたらすぐにでも新しいビルが建つのもかもしれない。

『ぼったくり』の常連客である要か哲が交じっていないだろうか、と美音は目を凝らしてみた。要も哲も建設関係の会社に勤めている。もしかしたらこの現場にも関わっているかもしれないと思ったが、目に入るの知らない男ばかりだった。「美音さん！」

突然後ろからかけられた声に驚き、美音は振り返る。

そこにいたのは『ぼったくり』で一番若い常連のリヨウだった。

「美音さん、大変っす！」

「どうしたの？ そんなに慌てて」

「ここを買ったのは大手のチェーンストアっす！ 下手すりゃここに、でっかいスーパーがでちまう！」

リヨウが告げたのは、全国で大規模に事業展開しているグループ企業の名前だった。スーパー、コンビニエンスストア、百貨店、薬局、トラベル事業、さらには金融業にまで手を広げ、海外進出も盛んにおこなっている。

あの会社が土地を買い上げたのなら、目的はショッピングセンターの建設に決まっている、そうなったら美音さんたちの商店街も影響を免れない、とリヨウは心配する。

「こんな中途半端な場所に大きなスーパーを建てたつてだめでしょ」

どうせならもっと郊外にばーんと建てればいいのにねえ、と美音は至って呑気に答えた。だが、リヨウは中途半端だからこそだと言う。

このあたりに大きなスーパーはないが、買い物をする人がいないわけではない。しばらく行った先に大きな団地がいくつもあるため、駅に向かう途中にあるこの

界限を通過していく人は多い。

駅前に行って大きなスーパーはないのだから、ここに新しいスーパーができれば食品や日用雑貨を買いたい人たちは喜んで利用するだろう。

「それに、商店街あたりに住んでる人だって、新しくてきれいなスーパーができたらそこに行かないとは限らないっす！」

いくら商店街が便利でも、アーケードひとつない通りである。雨でも降った日には、建物の中で全てがすませられるスーパーに行きたくなるのが人情というものだ。商店街存続の危機だ、とリヨウは額に汗を滲ませんばかりになっている。

「聞いてるんですか、美音さん！ もうちょっと驚くとかなんとか、反応の仕方があるでしょう!？」

黙り込んでいる美音にしびれを切らしてリヨウが詰め寄った。

「あ、うん、聞いている……」

この近隣にスーパーのような商業施設ができる可能性があることは、要から聞かされていた。それを念頭に置いて情報を得るべくアンテナを張り巡らせておく

ようにと言われたが、あまり大事おおごとにして周囲の不安を煽おほつてもいけない。だから美音は要の忠告を、町内会長のヒロシと、ご意見番であるシンゾウに告げるに留とどめた。

そんな美音にとってリヨウの話は、やっぱりか……という感じだったのだ。

「ところでリヨウちゃん、どうしてこんなところに？ 今日はお仕事は？」

「さっきまで市場調査をやってたんです」

今日はふたつ先の駅にあるビルの一室を借りて、アンケート調査をやっていた。それを済ませ、会社に戻る電車の中でスマホをいじっていて、偶然、この町についての情報を見つけたそうだ。小さな町だから記事になるようなことは滅多にないの、に、こういうことだろう？ と読んでみたら用地買収の話だったのだという。矢も楯もたまず、途中下車して現場にやってきたらしい。

「やっぱり！ 美音さん、これ見てください！」

リヨウは、そう言いながら工事現場の入り口に貼られた建設業の許可票を指し示した。そこには美音もよく知っている大手流通グループの名前があった。先ほ

ドリヨウが告げたのは、そのグループが展開するスーパーの店舗ブランドである。「こんな大手が来ちゃったらもう一発アウトっす！」

「でも、ここにシヨッピングセンターができたら便利になるわね。きっと『スーパー呉竹』よりも遅くまでやってるだろうし」

「なんでそんなに呑気なんですか！」

「だって、こういうシヨッピングセンターに居酒屋は入らないでしょ？」

「『ぼったくり』は平気でも、買い物客をとられて他の店がつぶれちゃったらどうするんですか！」

「ぼったくり」は客まで全部含めて『ぼったくり』だ。商店街の店がつぶれて、シンゾウやヒロシ、ミチヤたちが来なくなったら『ぼったくり』の雰囲気が変わってしまふ、とリヨウは言う。

「ほんとにそうよね……。ありがとう、リヨウちゃん」

リヨウが店を心配してくれる気持ちが嬉しくて、美音は心から礼を言った。

「そういうことじゃな……」

「お、美音坊、いいところで……。なんでえ、誰かと思えばリヨウじゃねえか！」

「あ、シンゾウさん！」

そこに通りかかったのはシンゾウだった。リヨウにしてみれば『強力な援軍登場』という心境だったのだろう。絶すがるような声の調子から、この呑気な人を何とかしてほしい、という気持ちが溢あふれてくるようだった。

「どうした？ こんなところで雁首がくびそろえて」

「シンゾウさん、聞いてくださいよ！」

そしてリヨウは、さつき拾ったばかりのニュースについてシンゾウに説明した。美音はそれとなくシンゾウの様子を窺うかがっていたが、やはり驚いた様子はなかった。おそらくシンゾウは、美音から話を聞いたあと、あの土地の買い手を調べたのだろう。

「そうか……。じゃあ、あの話、ちゃんと決まったんだな」

「え、シンゾウさん、知ってたんすか？」

「ああ、こないだタクのとーちゃんに聞いた」

「タク……って、誰？ そんな子いたっけ？」

「いやだ、リヨウちゃん。猫のタクよ」

ほら、リヨウちゃんとアキさんが公園から拾ってきた……という美音の説明で、リヨウはやっと思い当たったらしい。

「なんだ、そのタクか。じゃあ、とーちゃんって要さんのことっすね。シンゾウさん、どこで会ったんすか？」

「ここ」

なんでも、先日たまたまシンゾウが通りかかったとき、仮囲いの中から出てきた要と鉢合わせしたらしい。

「俺が、なんでえ、あんたの縄張りかい、って言ったら、縄張りじゃないですけどね、って笑ってた。だが、この工事には関わってるみたいだぞ」

「え、要さんって……？」

「要さん、建設関係のお仕事してるみたいですよ」

詳しいことなど美音も知らないが、妹の聲かおるに頼まれて野球場にお弁当を届け

に行ったとき、要は哲の相手チームにいた。哲は「取引先」と説明していたから、おそらく建設関係だろうと推測したにすぎない。だから、説明できるのはその程度だったが、リヨウはなるほど、と頷いた。

「そうか、要さんって哲さんと同じ仕事なんだ……」

リヨウの眩きにシンゾウはちよつと考えていたが、すぐに同意した。

「まあ、そうだな……たぶん同じような仕事だ」

「じゃあこのニュースを知ってるのは当然か……。要さんとも、関係してるんですか？」

「いや、わからん。ご覧のとおり、まだ建物を壊してる段階だから、その関係なのかこれから作るほうの関係なのか……」

「そうっすか……」

リヨウはがっかりした様子で、情報とかもらえるかと思っただのに……と眩いた。「無理だろう。それに、そんなことを聞いたところでどうしようもない。どんな風に建てるかは施主次第だし、建設業者は言われたとおりに建てるまでだ」



そう言いながら、シンゾウはにやりと笑った。

「それよりリヨウ、お前、こんなところでいつまでも油売っていいのか？」

電車の乗り継ぎが上手くいきませんでした、では通らないぐらい時間が経つちまってるんじゃないか、とシンゾウはリヨウに注意を促した。<sup>うなが</sup>

「やべっ！　じゃあ美音さん、また店で！」

そしてリヨウは、大慌てでバス停に向かつて走っていった。

「落ち着かねえ奴だなあ、ほんとに！」

リヨウを見送りつつシンゾウが苦笑いをする。

「そういえば、シンゾウさん。どうしたんですか、こんなところで？」

平日の昼間である。夕方から店を開ける『ぼったくり』とは異なり、シンゾウの薬局はまだ営業時間内のはず。店番はどうしたのだろう、リヨウちゃんに油を売っていいのかなんて言ってる場合ではないのでは？　と美音は不思議に思った。

「実は、ちよいと野暮用があつて出かけてきたところだ。今日は娘が来てるから

店番は頼んできた」

「モモコさんが戻ってきてるの!？」

早く言ってくださいよ！　と美音が大きな声を上げたのにはわけがある。

シンゾウにはオサムとモモコという、既に独立し、家庭も持っている子どもがいる。下の娘であるモモコは美音よりも十歳ほど年上だが、彼女は小さいころから美音を妹のように可愛がってくれた。

モモコは、自分が読み終えた本や飽きてしまったおもちゃを気前よくくれたり、勉強を教えてくれたり、それ以外にもあれこれ面倒を見てくれた。そんなモモコが美音は大好きで、彼女が結婚してこの町を出ていったときは本当に寂しかった。モモコはいかにも薬局の娘らしく大学で薬学を学び、無事に薬剤師の資格も取った。誰もが、このままシンゾウのあとを継ぐのだろうと思っていたのに、卒業して間もなくお嫁に行ってしまったのだ。

相手は地方から上京してきていた同級生。大きな病院の息子で、郷里に戻って院内薬局に勤めることになっていた。兄のオサムは薬学を志さなかつたために、

モモコはシンゾウの薬局をどうするか相当悩んだらしいが、結局『自分の幸せを取れ』とシンゾウに諭され、後ろ髪を引かれる思いでこの町を離れた。

遠く離れた町に嫁いだけだけに滅多に戻ってくることもなく、戻ったところで美音自身が忙しくてゆっくり話す暇もない。それでも、モモコが戻っていると聞いたら一目でも会いたい。美音は思わず駆け出しそうになってしまった。

「美音坊、そんなに慌てなくてもモモコは逃げねえよ」

「だってモモコさん、忙しいからっていつともんぼ返りじゃないですか」

「それが、今回はちよいとゆっくりしてくそうだ」

「え……？」

シンゾウの意外な言葉に、美音は走り出そうとした足を止めた。

「ちよūdいいや。美音坊、あいつの話聞いてやってくれねえか。なにやら悩んでるようなんだが、俺たちには言いたくないらしくてよ」

モモコは子どものころから典型的な優等生だった。プライドも高く、親の前ですらめったなことでは弱音を吐かない。これはウメから聞いた話だが、そのせい

で、シンゾウ夫婦が扱いに困ったこともあったらしい。

小さな大人そのものだったモモコのことだから、今回だって悩みを抱えて親元に戻ってきていても、素直に言い出せないのかもしれない。

だが幼なじみで、しかもうんと年下の美音であれば、ちらりと本音を覗かせる可能性も無きにしも非ず、とシンゾウは言うのだ。

「美音坊には失礼な話だが、あいつの中に『何にもわかってない子ども』って意識が残ってれば、独り言みたいに愚痴を漏らすかもしれねえと思ってるさ」

「なるほど……それはあるかもしれませんね」

まだ美音が小学生だったころ、モモコは通っていた高校でいじめにあっていた。優秀で教師の覚えが良く、男子生徒からも人気があったモモコをやっかんだ女子生徒たちの仕業だった。そのときもモモコは、教師にもシンゾウ夫婦にも告げずに耐え続けた。放課後、思い詰めたような顔で公園のベンチに座り込んでいたモモコは、たまたま入ってきた美音としばらく遊んでくれた。その間に、「あーあ、ドジ踏んじやった」とか「いじめなんて最低！」とか呟くのを聞いた美音は、家

に帰って母に訊ねた。

「『ドジ踏む』ってなあに？」

怪訝な顔になった母は、その言葉をどこで誰から聞いたのか、それ以外にどんなことを言っていたのかを美音に訊き、モモコがいじめにあっていることを察した。そして、おそらく店にやってきたシンゾウにも伝えたのだろう。

シンゾウ夫婦がどんな対応をしたかはわからないが、それ以後、モモコが思い詰めたような顔で公園のベンチに座っていることはなくなった。

「あのときみたいに上手くいくかどうかはわからないが、ダメ元で頼む」

日頃からお世話になりっぱなしのシンゾウに、こんな風に頭を下げられて断れるわけがない。美音は、お役に立てるかどうかわからないけれど……と断りを入れないながらも、シンゾウの頼みを引き受けた。

「モモコ、今帰ったぞ！　そこで美音坊に会ったから連れてきたぞ」

「あら、美音ちゃん、久しぶり！　元気そうね」

「はい。おかげさまで。モモコさんも元気でしたか？」

「おかげさまで私も元気よ！」

元気そうなモモコの様子に、美音は思わずシンゾウの顔を見た。シンゾウは微かに目を細めたあと、明るく言い放つ。

「とりあえず、店番ご苦労さん。駅前で甘いものを買ってきたから、美音坊と一緒にちよいと目方でも増やしゃがれ」

シンゾウが、そんなことを言いながら手にしていた紙袋を掲げると、モモコは呆れたような顔で答えた。

「やだ、お父さん、なんて言い方！　そんなこと言われたら、私も美音ちゃんも食べるに食べられないじゃない！」

「食ったら太る。そんなの当たり前じゃねえか」

「身も蓋もないわね。まあいいわ、美音ちゃん、お茶にしましょう」

そしてモモコは、美音を奥の部屋に誘った。

「ほんと、お父さんってちっとも変わらない。もうちょっと可愛げのある年寄り

になればいいのに」

「大きなお世話でえ！」

そう言い返したシンゾウに、モモコはあかんべえをした。子どもみたいな草のあと、もつと子どもみたいな嬉しそうな顔で紙袋を受け取り、奥の部屋に上がっていく。見送ったシンゾウの口から、俺の前じゃあ、いつつもこんなだ……という眩きが漏れる。

美音の目にもモモコは以前と変わらないように見える。だが、シンゾウの話から考えるに、モモコはシンゾウに心配かけまいとして空元気を出しているのだろう。

美音は「お邪魔しまーす」と言いながらモモコに続いて小上がりになっている部屋に入り、店との仕切り戸をすつと閉めた。

十

その日、『ぼったくり』にシンゾウがやってきたのは、いつもより少し遅い時間だった。

モモコの話が気になるだろうに、あえて遅くやってくるところがいかにもシンゾウらしい。息せき切って、という感じは『粹』じゃないと判断してのことだろう。しかも、客が途切れそうな時間を見計らって来たようなのに、自分からはモモコの話に触れようとしないという念の入れようであった。

「今日のおすすめはどんな感じだい？」

精一杯のやせ我慢で彼が口にした言葉に、いつもどおりの笑みを返し、美音は冷蔵庫から取り出した酒を注ぐ。

「サヨリのいいのが入りましたよ。山菜も珍しいのが……でも、まずは一杯どうぞ」

「ありがとよ。おっ、『満寿泉』か！ 久しぶりだな、この酒は」

「自分でも不思議なんですけど、春になると、このお酒を入れたくなるんですよ。吟醸酒特有の香りと柔らかい甘さが春を思わせるのかもしれない」

「ああ、わかるわかる。前にしゃしゃり出てくるわけでもねえのに、ちゃんと吟

醸酒だって感じさせてくれる。ふと気が付くと萌え始めてる木の芽みたいだ」

「そうなんですよ！」

美音は、うまく説明できなかったこの酒の印象を、シンゾウが的確に言葉にしてくれたことが嬉しくて、つい大声を出してしまった。

「よその蔵の大吟醸に匹敵しますよね！」

「『吟醸の満寿泉』って言われるぐらいだからなあ。吟醸酒にかける思いは深いだろうよ」

シンゾウの言うとおり、『満寿泉』を作っている榊田酒造店は、まだ吟醸酒というものが脚光を浴びる前——昭和四十年代半ばから吟醸酒造りに力を注いできた蔵である。昭和四十七年以降は鑑評会の金賞受賞常連となり、全国にその名を知らしめている。

日本酒愛好家の人々は大吟醸酒の素晴らしさを褒め称えるし、そのことについては美音も異論はない。だが価格が手ごろな上に、バランスのいい優れた味わいを持っている『満寿泉吟醸』は、庶民派『ぼったくり』にとって、とても頼りに

なる酒だった。

「この酒はなあ……ちょっとだけ冷やす、あるいはちょっとだけ温めるってあたりが一番旨いと俺は思ってる。だからこそ、暑すぎたり寒すぎたりしねえ春が、この酒には似合うのかもしれないねえ。美音坊の言うとおりだな」

俺は思ってる、という言葉に、シンゾウの酒に対する懐の広さが窺える。酒の呑み方はいろいろあり、造った蔵、あるいは売っている酒屋がすすめる呑み方を気に入る人ばかりとは限らない。それぞれが好きに呑めばいいが、自分はこの呑み方が好きだ、とシンゾウは言う。

どんな意見も評価も、こうやって他人の思いに余地を残して表せば、押しつけがましく聞こえないし、喧嘩にもならない。

目を細めてグラスに口をつけるシンゾウに、美音は今日もひとつ教えられた。

——シンゾウさんにはいつも教えられてばかり。でも今日は、私がシンゾウさんの役に立てるかもしれない。

そして美音は、シンゾウが気になって仕方がない話題を持ち出した。

「シンゾウさん、今日はありがとうございます。久しぶりにモモコさんとゆっくり話ができ嬉しかったです。カノンちゃんとも遊ばせてもらって、すっかり仲良しになっちゃいました」

「おう。喧しい孫の相手をしてくれてありがとうよ。モモコも美音坊と話せて喜んでたぜ」

「それで……」

「で……」

同時に口を開いたふたりの言葉がぶつかって、シンゾウと美音はどちらからともなく笑い出してしまった。

「だめだな、恰好つけたって親ばかは親ばかだ。モモコの様子が気になって仕方ねえ」

「当たり前じゃないですか」

離れて暮らす娘が急に戻ってきた。しかも何か心配事がありそうだ、となったら気にならないほうがおかしい。美音の言葉に、シンゾウはすっかり開き直った

らしかった。

「そう言ってくれると気が楽になるぜ。で、うちのはいったい何が原因で出戻ったんだ？」

「え、モモコさん、出戻ったの？」

突き出しの小鉢をシンゾウに出した馨が、驚いて素っ頓狂な声を上げた。慌てて美音が訂正する。

「違うわよ。シンゾウさんも、そういう言い方しちゃだめですよ」

「確かに。ほんとになっちゃったら困るもんね」

苦笑いのあと、シンゾウは小鉢の中のホタルイカを酢味噌に絡めてばくりとやった。

こいつが出てくると北陸も春だな、と呟いたあと、カウンターの向こうの美音を見上げて言葉を持つ。

「モモコさん、旦那さんとちよつとあつたみたいです」

「言いたい放題でやつつけちまったわけじゃないだろうな？」

末っ子の特性、とでもいうのだろうか。家族で一番年下の者はムードメーカーの役割を負いやすい。馨も同様であるが、その場を盛り上げたいばかりに、言葉を選ばず突っ込みを入れたりする。周りの者にしてみれば、いささか言葉が過ぎると思うこともあった。

シンゾウから見たモモコは、まさしく『言いたい放題』だったのだろう。

「まったく、あのお調子者は……」

「お調子者だつて悩みがないわけじゃないもん」

馨は憤然ふんぜんとしてモモコを庇かばう。きつと末っ子同士、気持ちがわかるのだろう。

「そいつは失礼した。だが、いったい何で……。あいつは亭主にべた惚れで、亭主さえいけば大丈夫だつて言い張つてやがった。亭主のほうだつてモモコを気に入ってくれてたし、俺たち夫婦も、これなら離れたところに出しても大丈夫だろうって……」

「そうだよね、モモコさん、誰にも負けないぐらいラブラブ夫婦になるんだつて言つてたもんね」

そのモモコさんが夫婦喧嘩、しかも実家に帰るほどつて……と馨も首を捻つている。

「自分に自信がありすぎるのが問題なのかも……つて言つてたわ」

薬学部への入学試験は難しいと聞いている。モモコはそれを薬々突破して入学、国家試験にもすんなり通つた。将来の伴侶も早々に決め、彼の親が営む病院で働くことになった。実家からは遠く離れているし、両親のことや薬局の今後も気になるけれど、それは仕方がない。おおむね順調な人生を歩んでいるとモモコ自身も思っていた。

ところが、いざ結婚してみたら、同じ病院に勤める医者の大半が彼の一族だった。しかも夫自身、医学部を目指すもかなわず薬学部に進んだという過去があり、家族に対する劣等感が強い。

仕事を始めたばかりのころは、失敗もたくさんしたし、身内だから余計に厳しく言われることも多かった。でもそれは、仕事に慣れて病院の役に立つうちに変



わっていくだろうと思っていた。ところが、二年、三年と過ぎてても夫が自分を卑下する気持ちは変わらず、むしろどんどん大きくなっていった。

そのうち家族、特に夫の兄弟の伴侶たちが、薬剤師夫婦であるモモコたちを軽んじ始めた。最近では、本人が医者にならないのなら、せめて医者と結婚してくれればよかったのに、と嘆くようになってきた。

「うちの病院、お医者さんが足りないのよ。特に女医さんがほしいみたいで……」

モモコの夫が、小児科とか産婦人科の女性医師と結婚してくれれば、うちの病院で働いてもらえたのに、とまで言われたらしい。

そうなる、モモコだって面白い。自分自身を否定されたも同然だからだ。「彼には、薬剤師のどこが悪いのって言ったんだけどね……」

夫は小さいころから医者の中で育ち、自分も医者になるとばかり思ってきた。それなのに医者になれなかった——その悔しさ、情けなさは、どうやっても払拭できない。親族が医者ばかりという状況がさらに拍車をかけ、夫は俯うつむくばかり。その状況にうんざりしているのだ、とモモコは言う。

「私はお父さんが町の人たちの身体を心配して相談に乗ったり、簡単にできる健康法をすすめたりする姿を見て育ってきたの。だから、薬剤師の果たす役割についてはよく知ってるし、誇りも持っているのよ。医師は病気や怪我を治す大事な仕事だけど、薬剤師だってそれに負けず劣らず立派な仕事なの。そのことを彼にもわかってもらいたいの……」

もちろん、町の薬局と大病院の院内薬局とでは認識が違うのかもしれないけれど……とモモコはもどかしそうに語った。

「モモコさん、すごく悔しそうでした。『うちは代々薬屋で、それを卑下したことなんて一度もない』って」

「へえ……そうかい」

シンゾウがわずかに頬を緩めた。

薬剤師という職業を選んだ時点で、モモコが家業に否定的ではないことはわかっていた。それをはっきりと口に出されたことで確証を得た、といったところ



だろう。

「やっぱり何浪してでも医師を目指すんだった、って嘆かれると、ふざけるなって言い返したくなるそうです。だいたい、目の前に同じ薬剤師がいるのにその発言は何なの、私に対する配慮は全然ないの？　って腹が立つって」

「それで急に帰ってきたってわけか……」

これまでは、たまに帰ってくるものがあってもせいぜい一泊二日。今回のように、しばらくお世話になるわ、なんて長期戦覚悟で乗り込んでくることなどなかった。しかも後顧の憂いなしを狙ってか、娘まで連れて……

「それでモモコさん、仕事は大丈夫なの？」

先の見えない休暇ってありなの？　と馨が心配そうな顔をする。確かに、いくら大病院で薬剤師が何人もいるといっても、休み続けるのは問題があるだろう。だが、それに関しては大丈夫らしい、とシンゾウがちよっと嬉しそうに言う。

「あいつ、言わなかったのか？　今、腹にふたり目があるんだ」

「え!?　そうなの!？」

そんな話は一言も出なかった、と美音は目を見張る。馨は、わあー、じゃあまたこっちに帰ってきて産むのかな、楽しみくと脳天気喜んでる。ひとり目のときは里帰り出産でこの町に帰ってきた。きつと今回もそうだろう、と期待しているらしい。

「まあ、そうなるだろうな。こっちで産むなら、一度は診てもらわなきゃならないからって休みを取ってきたらしいし」

「やったー！　じゃあそのときはカノンちゃんともいっぱい遊べるね」

馨は動物も好きだが子どもも大好きだ。だが、あいにくこの町には幼児が少ない。たとえ一時的にでも、年寄りが多いこの町に子どもが増えるのは嬉しい、と大喜びしている。もちろんそれは、美音も同様だった。だが、それが理由で帰ってきたとわかっているなら、なぜシンゾウは、なんか理由がありそうだから話を聞いてみてくれなにか、などと言ったのだろう。

その疑問を口にした美音に、シンゾウは少しきまり悪そうに答えた。

「いや、俺じゃなくてサヨがさ……」

戻ってきたモモコの様子をしばらく見ていた妻のサヨが、あの子ちよつと変だわ……と言いついたそうだと。

きつと悩みがあるに違いない。でもあの子のことだから、私たちに心配かけたことなく言い出せずにいるのだろう。なんとか探れないものかしら、と……

「母親って奴は恐ろしいね。ずーっと離れて暮らしてる娘の顔色を一発で読むだからさ」

そりゃあ亭主の悪行もすぐばれるってものだわ、とシンゾウは苦笑いを浮かべる。美音から見れば、シンゾウは悪行などとは縁がなさそうに思える。でもそれは今となってはの話で、若いころはやんちゃだったのかもしれない。

「お母さんっていうのは、それだけ子どもを見てるんだらうね。ちよつと違ったところがあればすぐわかるくらい……」

馨が少し遠い目をしてそう言った。おそらく、亡くなった母に思いを馳せているのだろう。

「まあそうだろうな。父親のほうはてんでほつたらかしだけどな」

シンゾウは、今度は苦笑いではなく、はははっ！ と元気よく笑った。美音と馨は顔を見合わせて、くすりと笑う。

ほつたらかしなんてとんでもない。やるべきことは充分にやっている。だからこそ、こんな風に茶化せるのだと姉妹にはちゃんとわかっていた。

「にしても……モモコの亭主にも困つたもんだな」

「自信のない男っていらいらするよね！」

まったくさあ！ と馨はちよつと鼻息を荒くする。

「おや？ やけに厳しいねえ、馨ちゃん」

「だって、哲君もときどきそうなるんだもん！ 俺なんか、俺なんかって言われたら、その俺のことが好きなあたしはどうなるの？ って思わない？」

「なんでえ、ただの惚気か」

「え……？」

馨には、そんなつもりはまったくなかったのだから。でも、聞いているほうにしてみれば、それは明らかに惚気。シンゾウに一刀両断されて当然だった。

「でも、モモコさんにも同じような気持ちがあるのかもしれないよ。薬剤師って仕事を軽んじられて面白くないのと同時に、旦那さんがそれに負けてるのも情けない、私が好きになった人なの……って」

「あるかもなあ。モモコはあれでけっこう旦那に惚れてるし、必要以上に自信たっぷりのところがあるから、そうじゃない人間を見るといらいらもするだろう。ましてや自分が選んだ相手がそれじゃ」

必要以上ということはないだろう、と美音は思う。

『男は外、女は家』の時代は遠く去ったとはいっても、女性が仕事を続けていくのはまだまだ楽ではない。モモコのように国家資格を持つ専門職にしても、いろいろ難しいことがあるだろう。女ながらに居酒屋の暖簾のれんを守る美音にはなんとなくわかる。

難しいあれこれに立ち向かうために、自信はあるに越したことはない。美音にしても、今日一日を何とか乗り切ろうと、精一杯胸を張っているのだ。

でも、美音たち姉妹に母としての気持ちが変わらないのと同様に、シンゾウに

も働く女性であるモモコの気持ちを計りかねる部分があるのかもしれない。そう思った美音は、あえてそれについて語ることはしなかった。

「ワンマンで俺様すぎる男も面倒だけど、その逆もね」

「なにごともしどほどがいいってところだな」

「ほんとほんと」

シンゾウと馨は何やら意気投合している。ふたりの会話を聞きながら、美音はなおも考え続ける。

自信がありすぎても困るし、なさすぎても困る。でもその兼ね合いはとても難しい。ほどほどなんて気楽に言われても、当人に見ればさっぱりわからないだろう。敵を作らずにすむように自信がないふりをして陰に隠れるか、敵を撥ね返せるように虚勢を張るか、いづれかしかないのかもしれない。モモコにしても、なけなしの自信を精一杯大きく膨くらませている可能性だってあるのだ。

「おいおい、美音坊、俺はそんなに食えねえよ」

シンゾウの声ではっとして手元を見ると、そこにはひとり分には多すぎる量の

サヨリが積み上がった。シンゾウが注文した天ぷらの下拵したごしらえで、開いたサヨリと大葉を重ねてくるくる巻いていたのだが、考え事をしていて作りすぎてしまった。

「ごめんなさい。確かに、ちょっと多かったですね」

照れ笑いをしながら、美音は作りすぎた分を冷蔵庫にしまう。サヨリは旬の食材だし、揚げたての天ぷらを好む常連は多い。きつと誰かが注文してくれるだろう。串で留めたサヨリに薄く天ぷら粉をまぶし、さらに溶いた天ぷら粉にくぐらせてから油に泳がせる。

じゅっ！ という気持ちのいい音がしてサヨリの周りに大きな泡が立つ。真剣な眼差しでサヨリを見つめていた美音は、泡が小さくなって浮き上がってきたところで引き上げ、油を切った。

「おまたせしました」

敷紙をのせた皿に移し、カウンター越しにシンゾウに渡す。本来なら馨に運ばせるべきなのだが、揚げたてを食べてほしくてちよつとの時間を惜しんでしまう

美音だった。

「塩と天つゆ、お好きなほうで、と言いたいところですが、できれば両方お試しください」

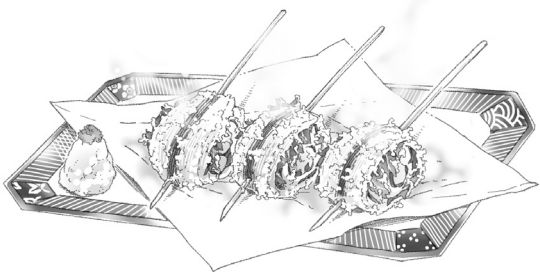
きっぱりとそう言い切った美音に、シンゾウが笑い出した。

「どっちも旨いから、って言うんだろ？ 美音坊も自信たっぷりだな。いやはや『女は強し』だな」

「自信なさそうにお料理を差し出す料理人なんて嫌でしょ？」

「ごもつとも。じゃあおすすめどおり、両方でいただくとするか」

そう言いながらも、シンゾウは既にサヨリのひとつにレモンを搾しぼっている。手で持った串刺



しのサヨリに塩をちよつとつけ、そのまま口に運ぶ。衣をかみ切るさくつという音が微かに聞こえた。

サヨリの食感とレモンの酸味、そしてほどよい塩辛さを感じているのだろう、シンゾウが目を閉じて唸る。

「このかりつとした衣の中にある白身の柔らかさはどうしたもんだ！ さくさくとふわふわが口の中で混じり合っただうにも堪えられねえ！」

しかもそこに大葉の香りまで加わって、もうどうしていいやら、とシンゾウはもんどりを打っている。挙げ句の果てに、なんてもんを出しやがるんだ！ とまで……

大葉とサヨリのコラボレーション。塩とレモンの相性なんて語られるまでもない。口の中いっぱいに広がる春の味わいを堪能しながら、シンゾウはしみじみと言う。

「春だなあ……春は本当に天ぶらの季節だなあ……」

「春は天ぶらの季節って……天ぶらはいつだって美味しいじゃない。天ぶらにで

きない食材なんて思いつかないよ。あたしなんて、無人島に何を持っていきますかって訊かれたら、天ぶら油って言っちゃいそう」

それじゃあ生き残りは難しそうだな、とシンゾウに言われ、馨は口を尖らせている。そんな妹に呆れつつも、美音も天ぶらは春、というシンゾウの意見に賛成だった。

「春が旬の食材って、どれも天ぶらにぴったりですよね。野菜も魚も……」

「だろ？ 山菜なんていい例だ。待ちに待った春、やっと芽吹いた山菜をとつとと取って揚げて食っちゃまうなんて人間もひどいもんだが、これだけ旨いとなあ……」

「あー山菜……確かに、そうだね。でも春になって生えた山菜が全部育ったらそれはそれで困るんだから、自然淘汰ってことでいいんじゃない？」

「おお、馨ちゃん、いいこと言った！」

馨は、山菜と聞いただけで『天ぶらは春』派に転向したらしく、シンゾウと意気投合して喜んでいる。それを横目で見ながら、生えた山菜が全部育って困る人っ

て誰だろう？ と美音はちよつと悩んでしまった。山の管理をしている人、環境について考えている人……まあ、なんにしても、山も荒らさず、乱獲もせず自然の恵みを享受するくらいなら支障ないだろう。

塩とレモンでサヨリの天ぶらを堪能したシンゾウは、続いてもうひとつを天つゆの小鉢に浸した。

「蕎麦は下のほうをちよつぱり、つてのが粹らしいが、天ぶらのつゆはどつぱりつけたって許されるよな」

シンゾウは、衣が水分で湿りすぎないように急いで引き上げ、口に運ぶ。少し時間が経っているし、天つゆに浸したことで天ぶらの温度も下がっているので、頬張ったところで火傷をする心配もない。衣を通じて天つゆの甘みがサヨリ全体に絡まり、塩とレモンのシャープさとはまったく違った味わいを醸し出す。同じサヨリの天ぶらなのに、添える調味料を変えるだけで別の料理のようになる、と常連たちはいつも喜んでくれていた。

口の中全体で魚を味わいつつ『満寿泉』をまた一口。シンゾウはまさに春の味わいを満喫していた。

悩みがない人なんていない。今だって、シンゾウの中にはモモコへの心配がある。その心配は美音から事情を聞いたことで、もっと大きくなったのかもしれない。でも、今、この一瞬だけは、それを忘れて料理を楽しんでくれている。

シンゾウが家に帰ったあと、サヨにこの話をして、またふたりして心配のため息を重ねることはわかってる。だからこそ、たとえ一時でも憂いを晴らしてもらえてよかった。食が人を癒す役割は大きいと改めて思う美音だった。

十

「要さんは、自信があるほうの人ですよね？」

美音の質問に、要がぶほつと酒を噴きそうになった。

シンゾウがカウンターにいる間に、他の常連たちが何人かやってきて、『ぼつ

たくり』はいつもながらの和やかな雰囲気が続いた。それぞれが『春の味わい』を堪能して帰ったあと、引き戸を開けたのはいつもの閉店間際の客——要だった。客が一度にやってきて、その対応に追われている間はシンゾウの心配を忘れていられた。だが客の波が引き、馨も家に帰したあと、美音はやっぱりモモコのことが気になってしまった。

——お医者さんになりたかったのはわかるけど、もう薬剤師さんになってるんだからその道で頑張ろうって気持ちになれないのかしら。モモコさんは実家から遠く離れて、しかも旦那さんの一族に囲まれて、それでも頑張ってるじゃない。カノンちゃんもいるし、新しい家族も増えるんだから、もつとモモコさんを支えてあげてほしいのに……

モモコの夫について、否定的な気持ちがふくれあがり、自分でも持て余しそうになっていた。そこに要が現れて、美音はつい、会ったこともないモモコの夫と要を比べてしまったのだ。

「なんだよ、それ。しかも『ですか?』じゃなくて『ですよね?』ってほとんど

断定じゃないか」

要の様子を見て、疲れているんだろうなと思うことはある。身体だけではなく、気持ちも大変みたいだな、と感じることも多々あった。けれどそれを本人から言い出したことはないし、美音には、この男が、アキやリヨウのようにカウンターに突っ伏しておれている姿なんて想像もできなかった。

落ち込むことってありますか? と質問を重ねた美音に、要は呆れたように言う。

「あのねえ……おれだって人間だからたまには落ち込むし、うじうじもする。かっこつけて隠してるだけ。今だってさ……」

何かあったんですか? と水を向けたほうがいいのだろうか。でも……と悩みつつ美音は、要の顔をじっくり見てしまった。

「新しい仕事はわからないことばかり。慣れてないんだから当然だけど、教えてもらいたくても周りもみんな忙しい。自力で何とかしなきゃ、って夜遅くまで頑張ってみてもやっぱりわからない。しかも、ここはわかった、これでいける、



と思ったことが全然見当違いだったり……もうね、情けなくなるよ」

「本当は、周りが忙しいからじゃなくて、教えてって言えないんじゃないですか？  
教えてもらうなんてプライドに聞かれるから……」

小首を傾げながらそんなことを訊いた美音に、要はちよつとやましそうな顔をした。

「ばれたか」

まあおれも、昨日や今日会社に入った新人じゃないしね……と言いながら、要は美音が差し出した徳利とくりをカウンター越しに猪口ちよこで受ける。

美音は、シンゾウが冷酒で呑んだ『満寿泉吟醸』を今度はぬる燗かんにしていた。夜が更けて気温が下がってきたせいもあるが、珍しい山菜を味わってもらうには燗酒かんざけのほうがいいと思ったからだ。本日のもうひとつのおすすり料理を小鉢に盛りつけながら、美音はさらに質問をした。

「それに、自分から名乗りをあげた仕事だから、泣きごとはいいたくない？」

「そのとおり。お見通しだな」

「大変ですわね……。でも、ここは会社じゃないんですから、泣きごとぐらゐ、いくらでもどうぞ。仕事を教えてって言われても困りますけど」

「うーん……それもどうかなあ」

燗酒をゆつくりと口の中で転がしながら、要は首を傾げる。

「来たときよりもちよつとだけ元気になって帰ってほしい、って言ったじゃないですか。泣きごとを言って元気になれるなら、いくらでもどうぞ。私、誰にも言いませんから」

「でも、おれが本気で愚痴ぐちりしたら目も当てられないよ。罵詈雑言ばりぞうごん吐きまくるかも。何せおれ、そいつみたいだからさ」

そう言いつつ要が目をやったのは、美音が塩焼きにするために取り出したサヨリだった。

怪訝けげんな顔になった美音に、要は言う。

「真まっ黒なんだろ、そいつの腹の中」

あつと思つた瞬間、噴き出した。確かにサヨリは、腹を開くと中が真まっ黒だ。



そのすんなりと美しい外見からは想像できないほどである。よりにもよってそんな魚に自分をたとえるなんて、と美音は笑いが止まらなくなってしまった。

「そこまで笑わなくても……」

「ごめんなさい。ちょっと変なツボに入っちゃったみたいで……。でも、いくらお腹の中が真っ黒でも大丈夫です」

「大丈夫って？」

「うちでは食べて美味しければそれが正義です。だからいくらでも腹黒丸出しで、罵詈雑言吐きまくってください」

それはどうも、と要は軽く頭を下げた。だが要は、それ以上仕事の話をすることも、泣きごとを言うこともなかった。

「我慢できなくなったら、吐き出させてもらうことにするよ」

そして彼は、小鉢の中の和え物を一箸口に入れる。

「これ……食べたことない味だ。なに？」

「ミズっていう山菜です。赤ミズと青ミズがあつてこれは赤のほう」

「どう違うの？」

「味も食感もよく似てゐるんですが、生えている場所が違うそうです。青ミズは山の奥の涼しくて湿った場所に限られるみたいですが、赤ミズは水があるところならけっこう生えてゐるらしいです」

「そうか。赤ミズのほうが庶民的なんだな」

山菜相手に庶民的って表現はどうなの？ と思わないでもなかったが、手に入れやすいという意味では確かに庶民的なのかもしれない。そう納得した美音は、ちよつと自慢げに言った。

「庶民的なら、うちに似合いですね。しかも塩昆布をまぶしただけっていう手抜き料理ですし、まさしく『ぼったくり』」

「手抜きねえ……」

要はそう言いながら、箸でつまみ上げた赤ミズをしみじみと見た。

「これさ、下拵えが大変じゃないの？」

「え？」

「山菜ってどれも、灰汁を取ったり皮を剥いたりで大変じゃないか」  
鋭い……

美音は感心せずにいられなかった。確かに山菜というのは、野菜に比べて断然手がかかる。同じような見てくれであっても、小松菜ならば茹でるだけですむが、赤ミズは皮を剥かなければならない。それをするのでしゃきしゃきの食感が得られるのだが、細い茎の皮を一本一本剥くのは大変な作業だ。しかも店で使うものだから量もそれなりにあって、今日は朝から馨とふたりがかりだった。

そんなに手のかかる山菜だからこそ、せめて味付けぐらいは……と塩昆布であえるだけに止めたのである。

「だと思った。君の言う『手抜き』はたいてい部分的なんだよね」

要はやけに嬉しそうに笑って言う。まるでからくりを見抜いてやったぞ、と言わんばかりの顔だった。

「見た目はすごく簡単そうに見えるけど、裏で随分手をかけてる。だからこそ旨いんだろうね。全編にわたり手抜き一辺倒、とかだったら旨いはずがないよ」

「あ、でも、素材がよければ……」

手をかけないほうが美味しいものだってあります、と続ける前に、要が口を挟んだ。

「その素材を探してくることも自体が大変だろう？」

「それだってヒロシさんやミチヤさんが……」

野菜だって魚だって肉だって、商店街の人たちがとびっきりのものを届けてくれる。美音はそれを受け取って料理するだけなのだ。ちっとも大変じゃない。

「確かに出入りの店はよくしてくれるかもしれない。でもそれは君と君のお父さんが作ってきた信頼関係の結果だよ。考えようによっては、下拵えよりずっと手のかかることかもしれない」

その信頼関係に基づく確かな仕入れができないとしたら、きっと君は自ら市場なり産地なりに乗り込んで食材を探さだろう。要するに、手抜きに徹するなんて不可能だね、と要は断言する。

「その恩恵に与る身としては、いつまでもそうあってほしいけど、君は大変だろ